様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年４月３０日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：18500462
研究課題名（和文）女性のパフォーマンス空間としてのアスコーナ

研究課題名（英文）Ascona as a Performance Space for Women

研究代表者
山口　庸子（YAMAGUCHI　YOKO）
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・准教授
研究者番号：00273201

研究成果の概要（和文）：
本研究では、20 世紀の芸術家コロニー、アスコーナのモンテ・ヴェリタの文化史的意義を解明し、詩人ラスカー＝シューラー、舞踊家バラ、画家ヴェレフキンら、女性芸術家にとっての芸術家コロニーの解放的意義を明らかにした。また、女性が主導した舞踊芸術と他芸術や社会状況との相互的関係を、精神医学、女子体操、身体文化運動を例に分析した。成果の一部を盛り込んだ著書『踊る身体の詩学』は、ドイツ語圏モダニズム期の舞踊を学際的な視野から包括的に論じた初の研究として二つの学会賞を受賞した。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research is to explore the importance of the artist colony "Monte Verità" in Ascona for the cultural history of the 20th century and to demonstrate the emancipatory effects that it had on women artists during the period of German modernity, especially Else Lasker-Schüler, Charlotte Bara and Marianne von Werefkin. Furthermore, it analyzes the relationships between dance and psychiatry; dance and women's gymnastics; and dance and body movement. The book *Odoru Shintai no Shigaku [Poetic of the Dancing Body],* which presents the results of this research, received two academic prizes as the first comprehensive interdisciplinary study on the dance of German modernity to be published in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,000,000	450,000	2,450,000

研究分野：独文学、舞踊学
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、身体教育学
キーワード：独文学、舞踊、身体文化、アスコーナ、ラスカー＝シューラー、バラ、ヴェレフキン、ヴィグマン

１．研究開始当初の背景

申請者は、2001－2004 年の科学研究費補助金による研究課題『ドイツ・モダンダンスのディスクール分析―その思想史的位置づけをめぐって―』（若手研究 B）において、モダンダンス成立期における舞踊家や舞踊批評家の言説が果たした役割を検討した。その過程で、モダニズム芸術の成立に、ベルリンの「新しい共同体」、ヴォルプスヴェーデ、スイスのアスコーナなど芸術家コロニーが、重要な役割を果たすことに気づいた。なかでも様々な芸術家が集ったアスコーナの「モンテ・ヴェリタ」は、文学・美術・舞踊などの女性芸術家にとっての解放的空間であり、女性が主導した舞踊と他芸術との関わりを分析するのに適切な事例であると考えた。

２．研究の目的

研究目的は、20 世紀前半で最重要の芸術家コロニーの一つであるスイス・アスコーナの「モンテ・ヴェリタ」における、女性芸術家による舞踊と他芸術との相互的関係の解明である。各年度の小テーマは(1)アスコーナの文化史的意義、(2)詩人エルゼ・ラスカー＝シューラー(3)舞踊家シャルロッテ・バラ、(4)画家マリアンネ・フォン・ヴェレフキンとした。

３．研究の方法

上記小テーマ(1)に関しては、舞踊を共通項としつつ、アナーキズム、神秘主義、改革運動、モダニズムの 4 項目に分けて概観する。同(2)は、詩人エルゼ・ラスカー＝シューラーの詩学と諸芸術、とりわけの舞踊との関連、またアスコーナで活動した舞踊家シャルロッテ・バラとの関係を調査する。同(3)は(2)を踏まえて、シャルロッテ・バラの経歴調査とバラの舞踊美学を分析、(4)では、マリアンネ・フォン・ヴェレフキンの経歴調査および絵画と舞踊の接点について分析する。(5) その他、当初の予定には入っていなかったが、研究の進行につれて視野に入ってきた問題として、身体論的・メディア論的観点から見たラスカー＝シューラーのイメージ戦略、ヘレラウやアスコーナで活躍した舞踊家メアリー・ヴィグマンと精神科医ハンス・プリンツホルンの舞踊観の分析を例とした、表現舞踊と精神医学の密接な関係の解明、またモダニズムの舞踊運動において重要で、アスコーナにおける舞踊運動にも関わりの深い「輪舞」をめぐる言説と実践の分析、および女性の身体文化との関連で、女子体操の一つである、Mensendieck-Gymnastik の調査を行った。

４．研究成果

研究成果は、以下のとおりである。

小テーマ(1)アスコーナの文化史的意義、に関しては、特に、2006 年 12 月に出版した単著『踊る身体の詩学―モデルネの舞踊表象』の第 4 章「語る身体――メアリーヴィグマンの舞踊詩」第 2 節「改革運動の諸潮流」（159－172 頁）、第 5 章「遊戯するオリエント―エルゼ・ラスカー＝シューラー」の第 3 節「初期のラスカー＝シューラーと改革運動」（209-221 頁）、第 7 節「中期以降の改革運動とラスカー＝シューラー」(235－241 頁）において、アスコーナの文化史的意義を、ベルリンの「新しい共同体」、ドイツ最初の園都市ヘレラウ、芸術家コロニー・ヴォルプスヴェーデとの関連において明らかにした。特に第 4 章第 2 節 (2)「アスコーナ」において、研究方法に掲げた 4 つの項目に沿った記述を行っている。本書は、ドイツ語圏モダニズム期の舞踊を学際的な視野から包括的に論じた初の研究として、2006 年度日本ドイツ学会奨励賞（2007 年）および第 5 回日本独文学会賞日本語研究部門（2008 年）を受賞した。また複数の新聞や学会誌、書評誌に、書評や紹介記事が出た。

小テーマ（2）に関しては、すでに上記の著書第 5 章「遊戯するオリエント―エルゼ・ラスカー＝シューラー」(204-248) において、ラスカー＝シューラーとアスコーナ、新しい共同体、ヘレラウなどの各芸術家コロニー、改革運動、舞踊との関連について幅広く論じた。また追加的成果として、学会発表⑤、⑦、⑧および雑誌論文④を挙げることができる。いずれもラスカー＝シューラーの詩学的戦略を、身体および、文字、写真、映画、郵便等のメディアという複合的視点から分析したものである。

小テーマ（3）に関しては、日本でほとんど知られていないシャルロッテ・バラについて、ヘレラウ、ヴォルプスヴェーデ、アスコーナという芸術家コロニーとの関わりのみならず、その経歴全般および舞踊美学を調査し、論文②にまとめた。舞踊家サハロフ夫妻との類似点や、ハインリヒ・フォーゲラーら造形芸術家らによるバラの舞踊の受容、バラの宗教的舞踊の特徴など、すべて国内初の議論である。

小テーマ（4）に関しては、成果を発表②にまとめた。主な内容は、ヴェレフキンにおけるロシア・リアリズムや象徴主義の影響、ミュンヘンのロシア人サークルにおける役

割、舞踊家サハロフ夫妻、ヴィグマン、バラとの交流、「心的な運動のリズム」を重視するヴェレフキンの美学とカンディンスキーとの親縁性、画家ミュンターやヤウレンスキーらによるサハロフのスケッチとの比較、である。本発表は、日本ではほとんど知られていない画家ヴェレフキンについての初めての本格的紹介であり、また舞踊史・美術史・およびモダニズムの文化史の観点から見て、舞踊と絵画、あるいは視覚文化と身体文化の相互作用に関する新たな知見を提示することができたと考えている。

(5) また追加的成果として、アスコーナのみならず舞踊運動・改革運動全般で重要な意味を持った「輪舞」についての表象と言説について、発表③および⑥を行った。発表⑥では、「輪舞」表象の文化史的・身体史的意義についてまとめたのち、リルケにおける輪舞表象を分析、発表③では、20 世紀初頭において、輪舞が、文明や近代化による社会の分断に対抗する、調和、統一、共同性の象徴として理解されたことを、リトミック体操、メーダウ体操やワンダーフォーゲル運動などの実践および、ヴァーグナー、ラーバン、クルト・ザックス、マックス・フォン・ベーンらの言説の分析によって明らかにした。

また身体文化運動への女性の参加という観点から 20 世紀初頭の重要な女子体操の一つである Mensendieck-Gymnastik を取り上げ、発表④および論文③においてその文化史的意義を明らかにした。メンゼンディーク体操は特にドイツ語圏を中心に、日本および世界的な反響を呼び、モダンダンスや服装改革などの改革運動、ファッションに大きな影響を与えたが、現在では国内外でほぼ忘れられており、本発表および論文は大きな意義を持つ。ここでは、メンゼンディーク体操受容の背景に、メンゼンディークが提唱した効率的で「優美」な身体が、生得的な「美」と異なり、(今日のダイエット等につながるような)努力によって獲得可能な身体美であったこと、それが社会進出を果たしつつあった女性の心を掴んだ側面があったことを明らかにした。発表②および論文①では、田園都市ヘレラウで出会い、一時期恋愛関係にあった舞踊家メアリー・ヴィグマンと、精神科医ハンス・プリンツホルンを取り上げ、モダニズムの芸術と精神医学の革新が、同時代の状況の中でいかに結びついていたかを明らかにした。プリンツホルンは、『精神病者の描画』によって、モダニズム芸術に大きな影響を与えている。本研究は、精神医学と舞踊および改革運動、ならびにモダニズムの芸術の密接な関係を、ヴィグマンおよびプリンツホルンの舞踊論を比較検討しつつ明らかにした初めての論文として国内外で大きな意義を持つ。

5．主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)
①山口庸子「表現舞踊と精神医学――メアリー・ヴィグマンとハンス・プリンツホルン」『日本病跡学会雑誌』、2010 年、査読有(印刷中)
②山口庸子「聖なる踊り子ーシャルロッテ・バラの舞踊美学における宗教性」、『言語文化論集』、第 30 巻 2 号、277－291 頁、2009 年、査読無。
③Yamaguchi, Yoko: Grace of Movement: An Aspect of the Body Aesthetic in German Body Culture, Proceedings of the International Conference: Thinking Gender in Culture and Society. Viewing Bodies, Reading Desire, Conceptualizing Families, 2009, 32-39.
④山口庸子「複製技術時代のユダヤ人・女性・詩人ーエルゼ・ラスカー＝シューラーのイメージ戦略」 『ナマール』(日本・ユダヤ文化研究会)、第 12 号、2－13 頁 2007 年。査読無。

〔学会発表〕(計 8 件)
①山口庸子「マリアンネ・フォン・ヴェレフキンにおける絵画と舞踊―予備的考察」、第 61 回舞踊学会大会、筑波大学、2009 年 12 月 5 日
②山口庸子「表現舞踊と精神医学――メアリー・ヴィグマンとその周辺」、第 56 回日本病跡学会「時代の病理と創造の跡へ」・シンポジウム『モダンの構造・モダンの病理』、名古屋大学、2009 年 6 月 13 日
③山口庸子〈根源〉としての輪舞―西欧市民社会への対抗表象」、シンポジウム「欧米の市民文化の諸相」、名古屋大学、2009 年 1 月 16 日
④Yamaguchi, Yoko: Grace of Movement: An Aspect of the Body Aesthetic in German Body Culture. International Conference: Thinking Gender in Culture and Society. Viewing Bodies, Reading Desire, Conceptualizing Families, 名古屋大学、2008 年 12 月 20 日
⑤Yamaguchi, Yoko: Brief als Medium der Transformation. Else Laksker-Schülers „Briefe nach Norwegen“ , 早稲田大学、Tagung: Übersetzung und Transformation, 2008 年 10 月 18 日
⑥ Yamaguchi, Yoko: Kreisen um die sakrale Mitte. Zu einem Bildkomplex in Rilkes Werk und dem zeitgenössichen Diskurs um den „Reigen“, 金沢星陵大学、Asiatische Germanistentagung 2008, 2008

年8月28日
⑦Yamaguchi, Yoko: „...meine norwegische Briefschaft ist ein Massenlustspiel": Sozial- und mediengschichtliche Aspekte bei Else Lasker-Schülers „Briefe nach Norwegen". Das 50. Tateshina-Symposion. アートランドホテル蓼科、2008年3月24日
⑧山口庸子「コンセプトとしての〈筆跡画〉エルゼ・ラスカー＝シューラーにおける身体・画像・文字」、シンポジウム「1890年—1930年のドイツ語圏の文化・芸術の解体と融合」 2007年独文学会東海支部冬季研究発表会、愛知大学車道校舎、2007年12月1日

〔図書〕（計1件）
山口庸子『踊る身体の詩学—モデルネの舞踊表象』名古屋大学出版会 2010年、全313頁。

〔その他〕
（受賞）
第5回日本独文学会賞日本語研究部門（2008年）
2006年度日本ドイツ学会奨励賞（2007年）

（書評掲載）
読売新聞2007年2月25日（書評）
中日新聞2007年1月16日（紹介記事）

6．研究組織
(1)研究代表者
山口 庸子（YAMAGUCHI YOKO）
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・准教授
研究者番号：273201